経過が頗る良好ナリシ状態ヲ記載セリ。然レドモ著者ハ唯一例、6 ヶ月ノ妊婦ニテ 24 歳ノ者が強度ノ齒齦炎ヲ有セルモノニ此ノ療法ヲ試ミシカドモノノ效果ナカリシ例モ附記セリ。

尙ホ著者ハ、目下、齒槽膿瘍、壊疽性齒牙及ビ齒髓炎等ニモ之レヲ應用中ナレドモ其ノ結果ハ後日發表セムト云ヘリ。

沃度蒸氣應用ノ際、著者ハ圖ノ如キ裝置ヲ利用セリ。

即チ、約 15-18 耗ノ長サヲ有スル「ガラス」管ニ、3 個ノ球狀ノ膨隆ヲ作り其ノ前端ハ稍々長キ管トナシ、後端ニハ吸引瓣ヲ備ヘタル「ゴム」球ヲ接續セシム。沃度結晶ハ最後ノ球狀膨隆部ニ置キ此物ト「ゴム」球トノ間ノ「ガラス」管内ニハ綿花ヲ插入ス。

使用ニ當リテハ、此ノ「ガラス」管ヲ「アルコールランプ」ノ上ニ翳シテ、前端ヨリ沃度ヲ容レタル球狀部マテ暖タメ、暗紫色ノ蒸氣ガ發生セシトキ之レヲ口腔ニ入レ、「ゴム」球ヲ靜ニ且ツ均等ニ壓シテ蒸氣ヲ局所ニ導ク。(金森)

保存療法科

壓迫麻醉ニ就テ Zeitschrift für Stomatologie. 1931 Heft 4.

Dr. Anton Schlemmer, Wien.

1885 年ニユルンベルグノ ボック 氏が初メテ 10-20 %ノ「コカイン」溶液ヲ象牙質知覺過敏ヲ壓迫麻醉ヲ麻痺スル方法ヲ行フテカラ今日ニ至ルマデ窩洞形成、齒髓摘出 ナドニ本法或ハ其ノ變法ガ實地ニハ充分ニ應用サレナクテ唯記載サレテキルノデアル。ト云フノハ局所麻醉ヤ傳達麻醉ガ發達シテ來タノト、此ノ壓迫麻醉ガ往々不成效ニ終リ勝ダカラデアルト前提シタ上著者ハ先壓迫麻醉ハ表在性麻醉ノ一變法ナル點カラ説キ、表在性ニ麻醉劑ヲ貼布シタ場合、貼布ノ時間溶液ノ濃度、當該組織ノ吸收力ノ如何ニヨリ麻醉ノ程度異ナルコトヲ説明シ、更ニ麻醉劑ノ吸收ハ麻醉劑ガ接觸セル組織ノ表面積ニ大ニ關係スルコトヲ説キ、壓迫麻醉ハ此ノ表面積ヲ大キクセンガ爲メニ壓迫力ニテ麻醉劑ヲ押シ込ムニ外ナラズト云ヘリ。

以上ノ考ヘカラ著者ハ壓迫麻醉ノ技術ヲ觀察シ、二大缺點即チ麻醉劑ヲ目的ノ場所ニ十分量ダケ置クコトノ出來難キコト、及ビ加ヘル壓迫力ガ所謂壓迫蓋ト窩洞壁トノ間カラ洩レルガタメニ、充分目的ヲ達スルダケ働カナイコトヲ指摘シ、自ラ多年ノ經驗ニヨツテ產シタ方法ヲ公ニシタ。

著者ハ壓迫蓋ヲ調製スルニ、今迄ノ蒸和「ゴム」ノ代リニ浸漬「ガタパーチア」ヲ使用シタ、此ノ調製法ハ彼ノ棒狀ノ「ストッピング」ヲ硝子板上ニテ、「スパチュラ」ヲツケルト引張ル程度迄加溫シ置キ、ソレニ細カク切りキザムガ綿花ヲ適當量入レテ、「スパチュラ」デ兩者ヲヨク混合スルノデアアル。混合中「ストッピング」ガ稍々硬化スル場合ハ硝子板ヲ再び加溫スベキデ、此ノ際煮沸水ヲ滿セル器ノ蓋ノ上ニ安置スルヲヨシトス、カクシテ調製セル浸漬「グッタペルカ」ハ永ク彈性ヲ保持シ之レヲ壓迫蓋トシテ使用スル際弛緩性ガアルノデ、ヨク窩壁ト氣密ナラシムルコトガ出來ルノデアアル。

次ニ今一ツノ困難、ソレハ使用スル麻酔劑ヲ目的トセル窩洞ノ場所ニ安置スルコトニ對シ、今迄主トシテ應用サレテ居ル方法、即チ「コカイン」溶液ヲ綿花ニツケテ其ノ部ニ置クナドノ方法ガ、多クノ場合其ノ場所ニ止マラズ窩洞外ニ流出スルコトアルヲ以テ、著者ハヘランデル氏ノ左ノ如キ處方ニヨル所謂砂糖「コカイン」糊劑ヲ用ヒ、「コカイン」溶液ノ流動性ヲ砂糖ノ追加ニヨリテ防ギ、目的部ニ麻酔劑ノ停止スル様ニセリ。

鹽化「アドレナリン」(1.100) 0.50

鹽酸「コカイン」 2.50

蔗 糖 2.00

右練和爲糊劑

尙右處方ニ一ニ二滴ノ「グリセリン」ヲ追加スレバ、糊劑ノ乾燥ヲ防ギ永ク糊狀ヲ保持得ト云フ。

其後著者ハビヒラー教授ノ注意ニヨリ「コカイン」ノ代リニ、毒力少ナキメルク會社製ノ「ブジカイン」(Psikain)ノ應用ヲ試ミ、尙該麻酔劑舊用ニ多少ノ考案ヲ施シタ、即チ砂糖ヲ附加セメ「ブジカイン」糊劑ヲバ、種々ノ大キサノ消毒セル綿球ニ浸シ充分浸漬シタ時ニ之ノ綿球ヲ化學用ノ秤量瓶ニ入レテ保存シ隨時使用ニ使ナラシム、又麻酔劑ニ「アドレナリン」ノ附加ニ關シテ著者ハ初メニハ之ノコトヲナサズ、天蓋除去後再び前記「ブジカイン」糊劑ヲ附ケル前ニ一ニ二滴ノ「アドレナリン」溶液ヲタラシ以テ止血ヲナシ或ハ麻酔劑ノ奏效ヲ助ケルコトトシタ。

次ニ著者ハ壓迫麻酔ノ主ナル適應症ハ殆ント齒髓露出ヲ來サメ計シノ深在蝕蝕アルトシ、且ツ齒髓炎ノ場合ニテモ壓迫麻酔ニヨリ細菌ヲ根端孔外ニ押シ出ストハ考ヘラレヌト其ノ理由ヲ舉ゲテ主張シテキル。

又麻酔劑ガ髓腔内齒髓ニ充分貼布サレレバ、ソレハ比較的短時間ニ深部根管齒髓ニ侵入シテ行クモノデアアルガ、若シ齒髓炎症ニ罹レル場合ハ、稍々趣ヲ異ニシ此ノ際ハ壓迫麻酔ハ無效ナルコト多ク、且ツ時ニ障礙ヲサヘ與ヘルコトガアル。

最後ニ著者ハ壓迫麻酔ハ唯夫レ自身單獨ニ齒髓摘出ニ應用サレルノミデナク、他ノ齒髓奪活法ト併用シテ屢々有效ニ用ヒラレルモノデアルコトヲ説イテキル、例ヘバ亞砒酸使用後所謂根端部ノ殘遺生活髓ノ拔去ニ際シ、又髓腔齒髓ガ壞疽ニ陥リ尙根齒髓ガ生活セルガ如キ際ニ、髓腔齒髓ヲ強酸ニテ洗ヒ出シ殘リノ根齒髓ヲ取り出ス際ノ如キ場合デアアル。

尙終リニ壓迫麻醉トハ直接關係ナキモ、前記根端殘遺齒髓炎失活ノ一法ニ筆ヲ及ボシテ曰ク、斯様ノ際ニハ紙製「ポイント」ニ石炭酸ヲ浸シ夫レニ「アジカイン」ノ結晶ヲ附ケ、夫レヲ根管ニ挿入シ、疼痛ナキ程度ニ進メテ其ノマヽ「ポンプ」作用ヲ行フベシ、然ル時小根管内ニハ濃度高キ「アジカイン」溶液ヲ生ジ、此ノ者カ殘遺齒髓ニ働キ容易ニ無痛ニ摘出ヲナシ得ルモノナリト説明シテキル。(長尾)

レントゲン像ニ於ケル根管治療 Die Wurzelbehandlung im Röntgenbild, von

W. Brühlmann, Schweizerische Monatsschrift für Zahnheilkunde. No. 1. 1931.

齒根尖端ニ骨吸収ニ因ル透明窩ヲレントゲン像ニテ發見シナイカラトイフテ之ヲ以テ健全齒ノ絶對的目標ト見做ス事ハ出來ナイケレドモ、根管治療ノ成因ハ標準トナル根管充填ノ程度ヲ示ス點ニ於テレントゲン像ハ一ノ目標ヲ吾々ニ與ヘルノデアル。著者ノ業績ハ無數ノレントゲン像ニ基イテ、根管充填カ何ノ點マデ成功シテ、其際齒根端部ガ如何ナル狀態ヲ示スカヲ確メルト同時ニ、齒髓拔去法ト切斷法トニ於テ何レガ齒根端透明窩ヲ作ル事ガ少ナイカヲ確メル事ヲ目的トシテ行ハレタモノデアル。

著者ハ根管ノ形態齒髓ノ全部抽出及ビ根管ノ全部充填ノ可能性ニ就キ文獻ヲ引照シテ、根管ノ形態ガ複雑ヲ極メ、齒髓ノ全部抽出ヲ企テテモ根管治療ノ完全ヲ期スル可能性ノ乏シイ事ヲ述ベ、齒髓全部抽出法ト齒髓切斷法トニ於テ、施術後齒根端組織ノ態度トレントゲン像トニ就キ從來ノ研究ヲ紹介シテ、1879年アドルフ、ウィツェルニ依リ行ハレタ齒髓切斷法 (Pulpaamputationsmethode) ガ今日ニ至ツテ理論的ノ根據ヲ得タ事ヲ述ベテ居ル。

著者ハチューリッヒ大學ノヘス教授ノ指導スル附屬醫院齒科部ニテ治療シタ 3324 例ノ齒牙ノレントゲン像ニ就テ

A. 齒髓抽出 (Pulpaexstirpation)

1. 齒根膜ノ狀態(A-1) 根端竝ビニ齒槽骨ニ病的變化ヲ認メナイモノヲ、健全齒トシテ然ラザルモノヲ疾病齒ト見做シタ。
2. 根管充填ノ程度(A-2)、之ヲ六段ニ分類シタ。a) 1/3 ノ僅少ノ程度ノモノ、b) 1/2 c) 2/3、d) 根端マデ 2-3 mm ノ距離ヲ有スルモノ、e) 全部充填、f) 根端孔カラ充填物カ突出セルモノヲ 6 種デアル。
3. 根管充填ノ程度ト根端組織ノ狀態トノ關係(A-3)
4. 根管充填ヲ施シタ時ト、レントゲンニ撮影ノ時期トニ依ル齒根膜ノ狀態。
5. 技術上ノ失策、根管内ニ於ケル器械ノ破折、根壁穿孔。
6. 齒牙ノ種類ニ依ル根管充填ノ程度。

B. 齒髓切斷 (Pulpaamputation)

1. 齒根膜ノ狀態(B-1)
2. 根管充填ノ時期ト、レントゲン撮影ノ時期トニ依ル齒根膜狀態。